

アジアの中の日本文化 -ことば・説話・芸能-

名古屋市立大学日本文化研究会 編
風間書房 2019年



名古屋市立大学大学院人間文化研究科
やまだあつし

◇紹介にあたって
本書は、本大学院の課題研究（現・コース）日本文化の修了生を中心とする研究会で出版した本です。この度、本の自己紹介をして欲しいと研究所から頼まれました。幸い本書は冒頭に「はじめに」という内容紹介の拙文があります。これを要約して、紹介の責を果たします。

◇本書の狙い

日本文化という言葉から、何を連想するでしょうか。本書は文化を伝える日本語ということば、信仰や言い伝えなどが元となっている説話、そしてことばや所作・体験を総合した芸能などの観点から日本文化を考える本です。さらに本書は、日本列島からも飛び出して考えます。文化は外に伝わります。漢字は中国由来、仏教はインドから中国や朝鮮を経て日本に伝わりました。日本の近隣には、植民地化によって日本文化が時には無理やり伝えられ、また今日のCOOL JAPANの流れの中で、再び日本文化が伝わっています。今までも、アジア諸地域との関連を見ずに日本文化を理解することは、仏教理解一つをとってみても難しいことでした。本書を「アジアの中の日本文化」と名付けた由縁です。

◇本書の概要

本書は三部構成です。「第一部 伝える日本語、伝わる日本語」の各章は、日本語ということばを考えます。成田徹男「ふりがなは大発明―ふりがなを活用しよう―」は、日本語を伝える上での大問題である書き言葉と話し言葉との違い、特に漢字の読みを、ふりがな活用によって解決しようと呼べた章です。吉田千寿子「言語のリズム、歌のリズム」

は、日本語を流ちょうに話す上で無視できないリズムをどう日本語学習者に伝えるかを、著者の指導実践から解き明かします。阪井芳貴「『しまくとぅば』をめぐる考察のために―うまりまぬ くとぅば わしりーねー くにん わしりぬん―」は、故・翁長雄志沖縄県知事のスピーチなどを素材にウチナーグチ（琉球方言）によって伝えられる沖縄県民の思いを考察します。他に手嶋大侑と黄如翎のコラムを載せます。

「第二部 信仰のなかで出会う日本文化」の各章は、日本文化に関連する信仰と説話に焦点を当てます。浅岡悦子「熱田神宮と草薙剣」は、三種の神器の一つで、熱田神宮に祀られる草薙剣を紹介します。市岡聡「二井寺説話から見る『法華験記』と地方寺院」は、十一世紀に編纂された説話集を題材に、地方寺院でどのような説話が作られたのかを寺院経済に踏み込んで分析します。柴田憲良「末法の克服―最澄の末法思想の理解を巡って―」は、比叡山を開いた最澄が、中国での仏教排撃運動を視野に入れながら、仏教衰退の時代とされる末法をどう理解していたかを解明します。他に、やまだあつしとジェームズ・バスキンドのコラムを載せます。

「第三部 伝わる日本文化、伝える日本文化」の各章は、日本文化を

地域や時代を超えた他者へ伝えることについて、(広義の)芸能を手掛かりに考えます。太田昌孝「西脇順三郎の挑戦―古代から超現実へ―」は、詩人で英文学者であった西脇が、古代祭祀への考察から、古代人が伝えていたことをどう自己の詩作へと結実させたかを考察します。文秀秀「中国におけるアイドル文化の考察―日本のアイドル文化からの影響―」は、ジャーニズ事務所の運営モデルを手掛かりに中国への日本文化の伝搬を分析します。小野純子「台湾に残る日本の姿―『KANNO』と蔡清輝氏のお話―」は、戦前の甲子園野球大会に台湾から出場した学校とその学校を育んだ街の思い出が現代にどう伝わっているのかの話です。他に、白真善と渡邊良永×柴田憲良のコラム、中村香織の特別寄稿を載せます。

◇おわりにあたって

ネット時代でも、書店に自分たちの本が並ぶのは、嬉しいことです。研究会は次の本を企画しています。皆さんも一緒に本を出しましょう。そのためにはまず、大学院・人間文化研究科を受験です。次の入試でお待ちしております。